

研究実践報告

大学祭における合唱に関する学生の取組

——初等教育学科から教育学科へつながる活動の意義——

長 澤 希*

Efforts of College Students Regarding Choral Singing at the University Festival:
The Significance of Connected Activities from the Department of
Elementary Education to the Department of Education

Nozomi NAGASAWA*

はじめに

新型コロナウイルスの流行により、2020年～2022年までの3年で音楽活動の在り方は大きく変わっていった。広島文教大学（以下、本学）でもこの間、様々な大学行事・学生の自治活動が制限されてきた。その1つが大学祭である。令和4年度は3年ぶりに対面での大学祭開催となった。本学の大学祭において毎年ステージで披露されてきた教育学科4年生による全員合唱は、初等教育学科から続く学科の伝統行事となっている。本稿では、大学祭の合唱の取組を記録することを通して、この伝統ある行事を学生自身が今後も繋いでいくための一助となることを願っている。

1. 初等教育学科から教育学科へ合唱の歴史

昭和56（1981）年4月、広島文教女子大学文学部に初等教育学科が設置された。そして、平成31（2019）年4月、男女共学に移行し、大学名称を広島文教大学に変更されたのは記憶に新しい。初等教育学科の歴史はおよそ38年間、その上に、新たに教育学科の4年の歴史が刻まれようとしている。初等教育学科の時代に大学祭の合唱が始まったようだが、その始まりの記録が残されている書物は残っていない。そのため、

本稿に述べることはその当時を知る学科教員への聴き取り¹⁾ および合唱についての記録があった唯一の書『初等教育学入門』（初等教育学科創設30年記念書）、児童教育コース音楽専修ゼミ（以下、音楽専修）・幼児教育コース音楽ゼミ（以下、音楽ゼミ）の引き継ぎノート²⁾に基づいてその歴史を辿り記録していく。

(1) 合唱のはじまりから現在

そのはじまりは、平成4年度12期生にある。この当時の4年チューターであった教員の熱心な指導体制とサポートにより、4年生による学年合唱の取組が始まったようである。最初は、“卒業の年に何かを残したい”という当時の学生の想いと、それを全力でサポートしたいという教員の熱い想いが活動の基盤となっていたと聞いている。その当時の実際の映像は残念ながら残されていないが、それから初等教育学科最後の年である38期生に至る26年間、半ば途切れることなく4年生の学年合唱の取組が続いてきた事実を見ても、おそらくこの最初の12期生の取組が後輩らに与えた影響が大きかったことが想像できる。合唱の取組が後輩に与えた影響については、次のような26期生の記録からも伺える。

“舞台上で誇らしく、涙して合唱する先輩の姿を見てきた。先輩ってすごい。次は自分たちの番である。このことを最初に思ったのは、1年次の大学祭だったかもしれない³⁾”

* 本学教育学部教育学科准教授

令和2年度および令和3年度は、コロナ禍により大学祭での合唱は叶わなかったが、令和4年度はおよそ3年ぶりに対面での合唱が実現した。令和2年度は世界的な感染症のパンデミックにより、音楽活動自体が激減し、本学での合唱の取組も中止せざるを得ない状況であった。令和3年度は、コロナ禍でも可能な音楽活動を日本中の人々が模索し続けていた年であり、本学も例外ではなかった。そのため、令和3年度の卒業生である38期生は、大学祭での合唱は叶わなかったのだが、卒業制作の1つとして時期を変えて合唱に取り組んだ。そして、本年度の令和4年度卒業生である教育学科1期生は、3年ぶりの対面開催となった大学祭にて、合唱を披露した。

(2) 具体的な取組内容

ここでは、合唱についての詳細な記録が残っている平成30(2018)年度の35期生以降の4年間の取組内容について具体的に記す。

①平成30年(2018)度_35期生の取組

以下は音楽専修・音楽ゼミの引き継ぎノートおよび資料に基づいて記す。

<p>○大学3年次11月の「プログラム育心」ごろから合唱の話題が出る。</p> <p>○毎月の「プログラム育心」の時間を使って、歌を歌う経験を積む。曲は月ごとに変えた。</p> <p>11月：『翼をください』</p> <p>12月：『Best Friend』</p> <p>1月：『Believe』</p> <p>*毎月の伴奏は音楽専修・音楽ゼミが担当</p> <p>○大学4年次4月</p> <p>・音楽専修・音楽ゼミが「プログラム育心」の時間に、「大学祭で、みんなで合唱をしよう」と呼びかけ、全員の承認を得る。</p> <p>・歌いたい曲がある人は、音楽専修・音楽ゼミにLINEで伝えてもらうように呼び掛ける。</p> <p>・伴奏者(3名)、指揮者(2名)の立候補者は、音楽専修・音楽ゼミに申し出るよう呼び掛ける。</p> <p>○大学4年次5月</p> <p>・学年から出してもらった曲の中から、音楽専修・音楽ゼミで話し合い、7曲にしぼる。合唱曲とJ-popのバランスを見て決めた。</p> <p>(7曲)：『あなたへ』、『栄光の架け橋』、『ハピネス』、『結』、『心に花を咲かせよう』、『花は咲く』、『花』</p> <p>○大学4年次6月</p> <p>・学友会大学祭実行委員からステージ企画の応募があり、提出する。</p> <p>・「プログラム育心」の時間にアンケートをとり、大学祭で歌う3曲を決定する。</p>

・音楽専修・音楽ゼミでの音取りの期間(実際のところは、みんなが忙しくなかなか集まって練習ができなかったため、それぞれの空きコマを見つけて音取りをした。)

・パートを決める。(ゼミごとに振り分け、音楽専修・音楽ゼミはバランスよく各パートに配置した。)

・曲ごとに歌のパートを変えた。

[パート分け]

①グループ：国語、教育、田中ゼミ、白石ゼミ

②グループ：算数、図工、心理、牧ゼミ、上村ゼミ、杉山ゼミ

③グループ：社会、理科、書道、体育、佐伯ゼミ、黒木ゼミ

・指揮者・伴奏者が決定する。全員立候補で決まる。指揮者のうち、1つは4年チューターに担当していただく。この年のチューターであった森先生にお願いをした。

・6月最後の週の「育心の時間」から練習がスタート。

・最初は音楽専修・音楽ゼミが模範演奏を披露した。

○大学4年次7月

・毎週水曜日の「育心の時間」(13:10~13:55)に練習する。

・練習場所：器楽室、合奏室、ML教室

・お手本の音源を作る。(各パートのもの=メロディをピアノで弾きながら歌ったものをスマートフォンのボイスメモで録音し、LINEで流す。先生方にはCDに焼いたものを渡した。)

・7月は『風になる』のみを練習した。

○大学4年次8月

・音楽専修・音楽ゼミのゼミ長が8月最初の学科会に参加させてもらい、先生方に楽譜を練習日程のプリントを渡す。(「一緒に歌いたいです」とアピールをする。学科会で楽譜を渡したいということ、チューター主任の先生に許可を得てから行かせてもらった。)

・夏休みも週に1回(13:10~14:10)練習をした。

・『結』、『あなたへ』の2曲を中心に練習した。

・児童教育コースは教授セミナーが終わるまではなかなか参加できなかった。

・8月後半は、幼児教育コースが就職活動でなかなか参加できなかった。

○大学4年次9月

・3曲をまんべんなく練習した。

・9月いっぱいまでに暗譜するよう呼び掛けた。

・9月21日(金)12:00~13:00で、大野内先生に指導をお願いした。(このときは全員暗譜で歌った。)先生と日時を相談して、全曲1回は指導してもらった。強弱や表現など細かいことまで指導していただき、とてもためになった。

○大学4年次10月

・毎週水曜日の「育心の時間」(13:10~13:55)に練習した。

・本番1週間前は、週2回練習した。

・パートによっては、パート練習を取り入れた。
(週1～2回)

・指揮者・伴奏者の個別レッスンをした。(これが本当に大変だった…) 指揮者・伴奏者の合わせ練習も行った。

* 9月後半～10月は、児童教育コース有志、初教有志の練習が始まった。

○大学祭当日

・出演時間10月7日(日)17:35～、当日祭の最後の番だった。

・大学祭実行委員会をお願いをして、16:35～17:05まで器楽室で練習させてもらった。

○大学祭合唱 先輩へのアドバイス

・合唱のリーダーはとても大変でした。初教全体プラス先生方をまとめるのは大変です。何事も早め早めに動いて余裕をもって計画して行くとよいと思います。大変なことが多かったですが、本番はみんなの心が一つになり、すてきな合唱をすることができたと思います。多くの人から「合唱楽しかった」「良かったよ」と言ってもらえて、ここまで頑張ってきてよかったと思いました。1人で仕事を抱え込むのではなく、音楽専修・音楽ゼミ全員で協力して頑張ってください。

②平成31(2019)年度_36期生の取組

以下は音楽専修・音楽ゼミの引き継ぎノートおよび資料に基づいて記す。

○大学3年次後期(*時期不明)

・「2019年大学祭初教合唱アンケート①」を実施した。アンケート内容は、「歌いたい曲名」、「伴奏者・指揮者・パートリーダー」の希望者を募った。

・「2019年大学祭初教合唱アンケート②」を実施した。アンケート①で出た候補曲から4曲にしぼるよう、以下の通り尋ねた。

[アンケート②]

質問1. 合唱曲

下の曲から1曲選び、記号に丸をしてください。

①虹(森山直太郎)

②道(山崎朋子)

質問2. ポップス

下のA～Cの中から1曲、ア～ウの中から1曲選び、記号に丸をしてください。

A いつかこの涙が

B 正解

C ありがとうの輪

ア やさしさに包まれたなら

イ 365日の紙飛行機

ウ リメンバーミー

○大学3年次2月

・パートリーダーが決まり、パートリーダーに向けて今後の練習予定を連絡した。

[パートリーダー今後の練習予定]

①3月15日(金)10:00～11:00『やさしさに包まれたなら』

②3月18日(月)11:00～12:00『虹』

③3月25日(月)10:00～11:00『いつかこの涙が』

④3月29日(金)10:00～12:00全曲

⑤4月1日(月)10:00～12:00全曲

* 4月第1回目の育心で合唱を披露する予定。

* 各パートの音源をつくる。(ボイスメモ)

○大学4年次4月

・「プログラム育心」の時間にグループ分け・パート分け・練習日程を全体に伝える。

[グループ分け]

A グループ: 心理、理科、書道、

杉山ゼミ、白石ゼミ

B グループ: 国語、社会、図工、音楽、

佐伯ゼミ、黒木ゼミ

C グループ: 算数、体育、上村ゼミ、

田中ゼミ、牧ゼミ

[パート分け]

・『やさしさに包まれたなら』

(A: ソプラノ、B: メゾソプラノ、C: アルト)

・『いつかこの涙が』

(A: メゾソプラノ、B: アルト、C: ソプラノ)

・『虹』

(A: アルト、B: ソプラノ、C: メゾソプラノ)

[練習日程]

①4月24日(水)13:10～13:55『やさしさに包まれたなら』

②5月15日(水)13:10～13:55『虹』

③5月22日(水)13:10～13:55『虹』

④6月12日(水)13:10～13:55『いつかこの涙が』

⑤6月26日(水)13:10～13:55『いつかこの涙が』

⑥7月10日(水)13:10～13:55全曲

⑦7月24日(水)13:10～13:55全曲

夏休み: 9月18日までに暗譜をしてください!

⑧8月7日(水)10:00～12:00

⑨9月18日(水)10:00～12:00

⑩9月27日(金)時間未定

⑪9月30日(月)時間未定 *大野内先生指導予定日

★文教祭 10月13日(日)

[その他]

・全11回の練習に加え、リハーサルが2回追加されます。

・今後の日程については、練習日程が変更する場合は早めにLINEに連絡します。

・練習を欠席する場合、欠席する前の練習日に欠席者名簿に名前を記入してください。

③令和2(2020)年度_37期生の取組

*コロナ禍により、中止。

④令和3(2021)年度_38期生の取組

以下は音楽専修・音楽ゼミの引き継ぎノートおよび資料に基づいて記す。

○当初の予定

[練習日程]

①4月21日(水)13:10～13:55

②4月28日(水)13:10～13:55

③ 5月12日(水) 13:10~13:55

④ 5月26日(水) 13:10~13:55

⑤ 6月16日(水) 13:10~13:55

⑦ 6月30日(水) 13:10~13:55

*①~⑦の日程はコロナ禍ですべて中止となる。

○卒業制作としての合唱イベント

・毎年大学祭で、4年生全員で合唱を行うことが恒例行事となっていた。しかし、あいにくコロナ感染拡大は収束せず、大学祭は中止に。しかし、この合唱の企画を取りやめず、イベントという形で行うことにした。結果的に、ローカルメディアに取り上げられる程の豊かな卒業イベントになった。

○38期生がこだわったこと

①「伝統行事だから仕方なし」ではなく自分たちでやると決めたということ

・「初等教育学科の伝統だから仕方なく」、「先生達がやれと言ったから」、などそのような受け身な理由で決断したわけではない。コロナウイルスというリスクがある中、そのような理由でやる必要はないからだ。合唱というツールを通して、38期生全員が本気になって前向きに取り組める、最後には大きな思い出となる企画をやりたい、という思いに約130名の学科の学生と先生方・外部の方々が共感し、自分たちの意志で参加した。

②38期生と38期生を支えるすべての人のための企画であること

・「主催者の自己満足のような企画」になってしまわないようにした。音楽専修・音楽ゼミが音楽の技術を見せつけている、温度差がある、そのような誤解を招く危険があると気付いた。38期生みんなが、そしてこの企画を支えたり見守ったりしてくださる先生方や保護者の方々、先輩・後輩が「この企画に関わってよかった」「38期生っていいな」と思えるような企画にすること・そう思えるような声掛けをすることを大切に。「みんながWinWinになること」はどんなときにも大事。

○企画内容

・コロナの状況の変化により、臨機応変に対応したり慎重に判断したり非対面での準備を行ったりした。そのため、全ての進行がギリギリになった。そのため、以下の実働よりも1ヶ月以上早く動くことを後輩にはお勧める。

○合唱イベントに向けた動き

9月21日 合唱担当者会議：中止にするかしないかを決める。時期的に例年のように3曲は練習できないという判断で、1曲入魂することを決定した。

9月22日 音楽専修ゼミ長と長澤先生との話し合い：外部から客を招いて本番を行うことはNG。コロナの状況次第で企画中止も考えられる。録音や撮影を行い、編集したものを学科卒業式で流す方向に。

9月24日 チューターガイダンスで全体に告知/曲決めに関わるアンケート開始(Microsoft Forms)：この日に文教祭中止が決定した。また、企画を中止しなかった理由、この企画にかける思い、コロナ対策の具体などを全体に説明。当初歌う予定であった3曲から1曲にしぼるためのアンケートを開始した。

9月28日 合唱曲決定：『カイト』(作詞作曲：米津玄師)に決定。(LINEで全体連絡)

10月18日 楽譜印刷・配布開始(各ゼミ長経由)

10月19日 パート分け決定。(LINEで連絡)

[パート分け]

- ・ソプラノ：国語、社会、図工、上村ゼミ、黒木ゼミ
- ・アルト(上)：算数、体育、書道、田中ゼミ、佐伯ゼミ、白石ゼミ
- ・アルト(下)：理科、教育、心理、情報、杉山ゼミ、牧ゼミ

10月21日 練習日程公開/本番日程決めに関わるアンケート開始(LINEで連絡)

11月10日 育心の時間：今後の練習について全体連絡

11月17日 育心の時間：練習①(於：体育館)：感染予防を考慮し、パート練習のみ実施。譜読みを3分の1程度終えた。

11月24日 育心の時間：練習②(於：体育館)：パート練習および全体練習。譜読みをほぼ全て終わらせた。

11月27日 外部業者「ココロトプロダクション」の企画代表、担当教員(4年チューター)で打ち合わせ：学科予算を提示し、コロナ禍だからできる合唱・卒業イベントを再検討した。次の2点が決まる。

①合唱収録のために用意していた70分間を、先生方やゲストを招いた卒業イベントにしよう

②4年間の思いを1曲に込めて本気で歌った合唱音源を広島のローカルラジオで流して、県内外問わずたくさんの方々に届けよう

[業者をお願いしたこと]

*企画コーディネーター(プログラム構成・演出など)

*録音機材の貸し出し

*録音・撮影・動画編集など

11月30日 育心の時間：業者と学生との最終打ち合わせ

12月1日 楽譜の製本について連絡(LINEで全体連絡)

12月8日 育心の時間：練習③(於：体育館)：パート練習および全体練習。全体練習では、曲や歌詞の意味、作曲者の思いと自分たちの4年間を照らし合わせられるようにした。よりまとまった美しい合唱を目指して練習した。

12月13日 4コマ 本番

[当日のプログラム]

- ①トークショー 17分
 - ②先生方のメッセージ 11分
 - ③スペシャルゲストによる MusicLive 5分
 - ④涙のセッション 13分
 - ⑤モザイクアートオープン 3分
- *38期生卒業制作お披露目

⑥合唱 -First Take- 15分

・4年間の思いを1曲に本気で込められるようなプログラム構成・演出をしていただいた。

・学内に留まらず外部の方々からもたくさんのエールをいただき、こんなにも愛情を注がれながら4年間を過ごせたこと、ご縁によって出会った仲間たちの思い出を振り返ることができ、最後に一発録りで、本気で合唱にみんなの思いを込めた。

本番後

・RCC ラジオ「Alice Hiroshima! Fun♪ Radio」において、本番の合唱音源が配信された。
 ・中国新聞 SELECT において、紹介された。
 ・学科卒業式放映「合唱イベントダイジェストムービー」を制作していただいた。
 ・卒業記念品として、この度の「合唱イベントダイジェストムービー」、「合唱イベントフルムービー」のデータが入ったUSBが卒業生全員に配布された。

(3) 合唱曲の移り変わり

以下は音楽専修・音楽ゼミの引き継ぎノートおよび資料に基づいて、記録に残っているもののみを記す。尚、平成24年度（初等教育学科30期生）以前の合唱曲については、記録に残っていない。各年の合唱の曲目については表1に記す。

表1 各年の合唱の曲目

実施年度	期	合唱曲
令和4年度	教育1期生	①『空も飛べるはず』 ②『Happiness』
令和3年度	初教38期生	①『カイト』 *大学祭合唱は中止。別途卒業制作イベントとして実施。
令和2年度	初教37期生	*コロナ禍により中止
平成31年度	初教36期生	①『やさしさに包まれたなら』 ②『虹』 ③『いつかこの涙が』
平成30年度	初教35期生	①『結』 ②『風になる』 ③『あなたへ』
平成29年度	初教34期生	①『絆』 ②『story』 ③『旅立ちの日に』
平成28年度	初教33期生	①『心の瞳』 ②『糸』 ③『にじいろ』
平成27年度	初教32期生	①『ひまわりの約束』 ②『歩いていこう』 ③『友～旅立ちのとき～』
平成26年度	初教31期生	①『ふるさと』 ②『僕が一番欲しかったもの』 ③『夢を味方に』
平成25年度	初教30期生	①『Best Friend』 ②『とのおく とおく』 ③『ハピネス』

*平成24年度以前の合唱曲は不明

2. 「初等教育学入門（2010）」にみる合唱の価値

広島文教女子大学初等教育学科創設30年目の節目に出版された書籍『初等教育学入門』の第5章「学びを支える仲間づくり」、第2節「大学祭合唱・学科卒業式など」のなかに、大学祭の合唱についての記述が残っている。ここでは、26期生（平成21（2009）年度）の取組が紹介されている。当時は学科卒業式に3年生も参加していたとの記録があるが、その3月の学科卒業式に参加した直後から、合唱に向けての取組を始めている。この年も、取組の中心となったのは音楽専修と音楽ゼミの学生であったようである。3月の学科卒業式後に、音楽専修・音楽ゼミで話し合い、各ゼミへ歌いたい曲を2～3曲ずつ出して下さいと連絡する。その後、進級した4月に曲が決定する。この年は、『手紙』、『友だちのうた』、『ベストフレンド』の3曲に決定したと記されている。また、決定した曲の楽譜探し、伴奏者の決定は同月に行われている。5月には楽譜印刷、各ゼミへの配付。6月には、教員への参加依頼、伴奏入りデモCDを作成し、各ゼミへ配付。同書には、6月は「授業や実習、教授対策のため、全員での練習日が取れない」との苦勞した状況も記されていた。7月には指揮者を募集し、初めての練習が開始。8・9月も練習、そして教員へ練習日予定表を配付。後期開始の10月より、練習が再開されている。10月以降の練習日程については、以下の記録が残っている。

10月2日（金）	2コマ
10月5日（月）	3コマ 体育館リハーサル
10月6日（火）	5コマ
10月7日（水）	4コマ
10月8日（木）	2コマ（児教・心理） 3コマ（幼教） 5コマ 舞台リハーサル
10月9日（金）	予備日
10月11日（日）	本番

10月の練習の様子について、同書の中で善本(2010)⁴⁾は次のように述べている。

“後期授業開始2日目の10月2日（金）2コマ目。今日は後期になって初めての練習で

あることを聞いた。音楽棟に歌声が響いてきた。器楽室へ行くと、パートごとの練習、全体練習と、スケジュールが板書されていたが、何より驚いたのは、70余名の学生が参加していたことである。教室の机や椅子を移動してスペースを作り、立ち位置や並び方、振り付けなども学生たちが全員積極的に話し合っていて動いている。有志が申し出て、当日の服装について考えたり、曲中でのせりふを相談したりすることになった。また、26期生のシンボル「ほし」をどうアピールするかについては、全員で考えていこうということになった。音専や音ゼミの学生にすべてを任せるのではなく、4年生全員が、参加者の一人として関わっている様子が伝わってきた。4年次になり、授業がない日であっても、毎日の自主練習に、何十人も学生が参加している。⁵⁾”

これらの記述から、学生が受け身でやらされているのではなく、自分たちの思いに突き動かされて主体的に取り組んでいた様子が伺えた。また、教員の在り方についても、先導して行く立場ではなく、あくまでも学生の自治に任せ、主体的に行えるようにそっと見守っているような印象を受けた。自分たちの活動を自分事として捉えて動くことのできる学生の姿がそこにあったのだろうと推察する。また、同書には大学祭後の学生の感想についても記されていた。

“大きな一つの行事を行うには、一人ではできない。たいへんそうだ、と気づくこと。自分なら今何ができるか、と考えること。そっと手をさしのべること。一人で生きているのではなく、友だちに支えられているから。そして自分にできることで、友だちを支える。⁶⁾”
 “文教に来てよかった。みんなに出会えてよかった。⁷⁾”
 “合唱を、みんなですることができた。ありがとう。みんなが一つになることができた。そしてこのすばらしい伝統を後輩へ伝えたい。⁸⁾”

これらの記述より、当時の学生たちがこの合唱の取組に懸けた思いが伝わるようであった。このような合唱の取組は、単に美しいハーモニーを創ることに重きを置かれているわけではなく、学生が感じられたような自己理解や他者理解・自己肯定感の高まりといった、個と集団の内面的な価値を高めていることに繋がっていたと考える。それは、音楽活動がもつ価値にも通ずるところであり、尚且つ、当時の広島文教女子大学の強みである“文教らしさ”の中で育った学生たちの素直さや誠実さ・集団力のようなものが土台となり、合唱活動自体の意義を高めていったのだと考える。

3. 令和4年度_教育学科1期生の合唱の取組

ここでは、令和4年度の教育学科1期生の合唱の取組について述べる。前述した通り、令和4年度は3年ぶりに対面での大学祭開催となった。教育学科1期生は、先輩たちの大学祭での合唱の様子を1年次のときにしか見ていないため、多くの学生が大学祭での合唱についてのイメージを持つことができない状態で自分たちの取組をスタートさせている。さらには、2年次・3年次とオンライン授業が導入されたり多くの大学行事、宿泊を伴う野外活動、クラブ・サークル活動等が形を変えたり中止になったりしたことにより、授業以外において人との繋がりをつくる経験があまりできなかった学年でもあった。しかしながら、自分たちなりに試行錯誤して、先輩方の想いを引き継ぎながらも新しい教育学科としての形を残そうと奮闘していた。

(1) 教育学科1期生の具体的な取組内容

令和4年度の4年生は、次の日程で合唱の取組を行っている。

<p>○2022年4月8日 チューターガイダンス 初等教育学科続く伝統行事として「合唱」があることをチューターから全体に周知される。音楽専修と音楽ゼミが合唱の実行委員となる。</p> <p>○2022年5月18日 プログラム育心 候補曲として挙がっている曲のなかから1曲を決めるアンケートを実施する。 〔候補曲〕 『ふるさと／嵐』、『心の瞳／坂本九』、 『大切なもの／山崎朋子』、 『空も飛べるはず／スピッツ』、</p>

『何度でも／DREAMS COME TRUE』

上記のなかから、『空も飛べるはず／スピッツ』に決定する。

○2022年6月15日 プログラム育心

・ゼミごとに2曲目の候補となる曲を1曲ずつ挙げてもらい、そのなかから音楽専修・音楽ゼミで決定する。

[候補曲]

『happiness／嵐』、『明日も／SHISHAMO』、

『全力少年／スキマスイッチ』、

『あなたへ／』、『群青／YOASOBI』

上記のなかから、『happiness／嵐』に決定する。

・パート分けを発表する。

[パート]

ソプラノ：白石ゼミ、三田ゼミ、庄ゼミ、
小西ゼミ、上利ゼミ、川西ゼミ、笹原
ゼミ、今崎ゼミ、杉山ゼミ、新見ゼ
ミ、田中ゼミ

アルト：橋村ゼミ、黒木ゼミ、岡ゼミ、
村上ゼミ、牧ゼミ、佐伯ゼミ、
猪川ゼミ、上村ゼミ、森ゼミ

・今後の練習日程を伝える。

[練習日程]

- ・2022年6月22日 育心の時間 練習①
 - ・2022年6月29日 育心の時間 練習②
 - ・2022年7月27日 育心の時間 練習③
 - ・2022年8月3日 育心の時間 練習④
 - ・2022年8月10日 育心の時間 練習⑤
 - ・2022年9月28日 育心の時間 練習⑥
 - ・2022年10月5日 育心の時間 練習⑦
- リハーサル

○2022年10月3日～7日 朝練習

本番前1週間は、合唱の実行委員とその他有志が集まり、音楽科の教員の指導のもの朝練習を行った。朝8時30分から9時までのおよそ30分間の練習であったが、毎日10～20名の学生が参加していた。

○2022年10月10日 大学祭当日

本年度の大学祭は1日開催、来場者は学内限定で外部からの来場は禁止のなかで実施された。教育学科は有志企画のなかの最初の出番14：30からの15分間のステージが設けられた。『空も飛べるはず』と『happiness』の2曲の順で披露された。1曲目の指揮者はチューター主任の小西弘信教授、伴奏者は4年三好達也学生が務めた。さらに、ギター伴奏として岡利道教授が参加された。2曲目の指揮者は4年山崎晟太学生、伴奏者は4年廣津紗弥香学生が務めた。その他、有志として学科長を含む10名の学科教員が合唱に参加した。

男女共学となって初めての合唱であることを象徴するかのようになり、男子学生がピアノ伴奏および指揮者を担当し、共学の色が現れる形となった。また、これまで女子大であった初等教育学科では女声による同声合唱であったものが、混声3部合唱となり、歌声にも男声パートの力強さが加わった。

Formsを用いて実施した。

- ・調査日
令和4年10月10日～10月15日
- ・調査対象
教育学科に在籍する4年生 163名
- ・調査方法
Microsoft Formsを用いたWeb調査
- ・回答者数の内訳
初等_幼児教育コース 46名
初等_児童教育コース 53名
中等_英語教育コース 2名
中等_国語教育コース 8名

計109名/162名

アンケートの回答者は109名であったが、大学祭当日の合唱に参加した学生は102名であった。これは教育学科4年生全体の62.9%にあたる。さらに参加者の内訳を、表2に示す。

表2 令和4年度_大学祭合唱の参加者の内訳

当日参加者	初等教育専攻	中等教育専攻
男	17名/30名	2名/13名
女	77名/104名	6名/15名
計	94名/134名	8名/28名
総計	102名/162名	

専攻別に見てみると、初等教育専攻の学生参加者が134名中94名、中等教育専攻の学生参加者が28名中8名であった。割合にすると、初等教育専攻の学生参加率がおよそ70%、中等教育専攻の学生参加率がおよそ28.5%であった。また、男女別にみると、男子学生の参加率が44%、女子学生の参加率が69.7%であった。以上より、初等教育専攻の学生、女子学生の参加率が高い状況であったことが分かる。中等教育専攻の学生は、カリキュラム上、4年次の教育実習と教員採用試験を同時に迎えることになるため、その時期と合唱の練習日程が重なり、合唱の取組への参加率が下がったことが予想される。

図1では、合唱の取組全般についての感想を尋ねた結果を示す。この問いでは、「文教祭に向けた合唱の取組全般について感想を教えてください。」と尋ね、5段階（とても満足している、満足している、どちらでもない、あまり満足していない、満足していない）で回答を得た。

(2) 大学祭後の合唱に関するアンケート調査

アンケート調査は、合唱の本番後にMicrosoft

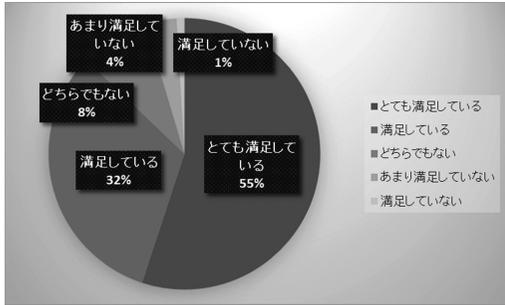


図1 合唱の取組全般の満足度

「とても満足している」「満足している」と肯定的な回答をした学生は87%であった。一方で、「あまり満足していない」「満足していない」の否定的な回答をした学生は5%、「わからない」と回答した学生は8%であった。この間では、その選択肢を選んだ理由を自由記述により尋ねている。その結果をテキストマイニングしたものを図2に示す。

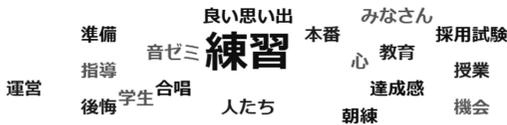


図2 満足度の回答理由（テキストマイニング）

「満足していない」と回答した学生は1名のみであったが、その理由は「特に参加しなかったため」とある。「あまり満足していない」と回答したのは4名で、そのうち3名は実行委員の学生であった。「もっと上手く進められたのではないか」という運営面での自己の反省の色が濃く現れていた。

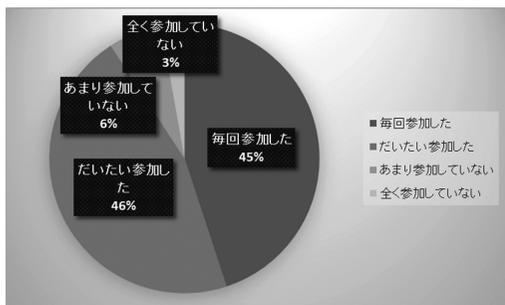


図3 合唱練習の参加状況

合唱練習の参加状況については図3の通りである。

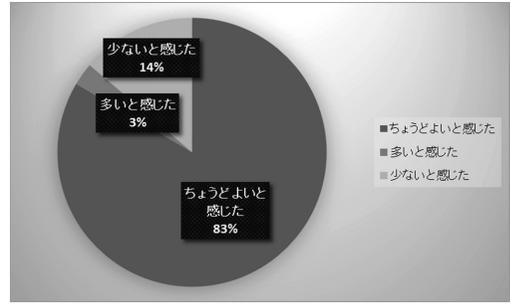


図4 合唱練習の頻度

合唱練習については、6月からスタートさせているため、おおよそ3～4月にスタートさせていた初等教育学科に比べるとやや遅い始まりとなっていたのだが、8割の学生は練習の頻度には満足していたと言える。(図4)

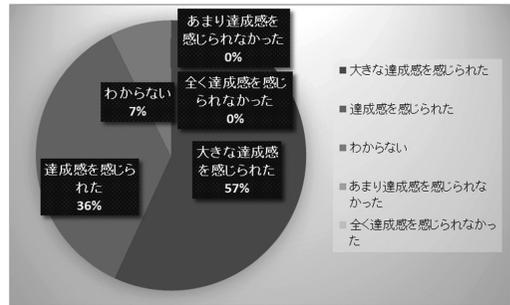


図5 合唱の達成感

続いて、達成感についても5段階で尋ねている。(図5) 全体の93%の学生が、達成感を感じられたようである。また、達成感を感じられなかった学生はいなかった。「わからない」と回答したのは8名(7%)であったが、そのうちの7名は、実習等で本番も参加できなかったこと、練習にあまり参加できなかったこと、を理由に挙げていた。達成感についての回答理由をテキストマイニングしたものを図6に示す。



図6 達成度の回答理由（テキストマイニング）

全員で何か1つのものを成し遂げる経験があまりできなかった数年間であったため、やっと

経験できたことに喜びを感じられた学生が多かったようである。一方で、参加率という面においては課題が残った。特に、4年次に実習を迎える中等教育専攻の学生の参加率が3割程度であったことについては、“自分自身も大変だけれどもそれでも参加したい”、“参加してよかった”とそう思えるような取組になるよう改善の余地があるだろう。

4. これからの合唱

令和4年度に在籍していた大学1年生から3年生はこれまでに先輩が築いてきた初等教育学科の合唱の歴史や、いかに合唱の取組が毎年大切にされてきたのかという伝統を知らない世代の学生たちであった。代々の学生が大事にしてきた伝統や文化のようなものを肌で感じられる機会や経験を、無念にもコロナ禍の波が奪い去ってしまった。しかしながら、教育学科1期生は、初等教育学科の精神を受け継ぎながらも自分たちで新たな合唱の在り方を模索し、創り上げてきた。この取組を、後輩にも繋いでいきたいという4年生の思いから、昨年度、3年生全員が集まる11月の「プログラム育心」の時間を利用して、合唱に関するプレゼンテーションを後輩に向けて実施した。また、この日の「プログラム育心」では、4年生の話とともに3年チューターからも合唱に関わる講話があった。合唱にまつわる様々な話を聞いた3年生の感想には、“教育学科が代々合唱をしていることを初めて知った”や、“初等教育学科の頃から合唱が続いていたことを初めて知り、伝統ある行事になっていることに驚いた”という意見が散見された。一方で、来年度の自分たちの姿に想像を膨らませながら話を聞いていた3年生も既に行った。それは次の記述からも伺える。

“今までは「伝統だからどうせやるでしょ」という感じでしたが、先生や先輩方のお話を聞いて、「私達もやりたい」「あんな素敵な4年生になりたい」と思いました。大変なことばかりだと思いますが、今までの伝統を受け継いで、自分たちなりの合唱を作り上げたいと思いました。⁹⁾”

“合唱が自分たちの代の繋がりのためだけで

はなく、これまでの先輩方から毎年受け継いできたものだという理由を知ることができた。コロナ禍で入学式やその他行事が体験できず、友達ができるか不安でした。そのため、こうして私の周りにいる友人や先生方の存在は当たり前なものではない、同じコロナ禍を経験しているからこそ分かり合える大切な存在であることを実感すると同時に、合唱は自分たちのためだけでなく、代々合唱を受け継いでこられた先輩方、いつも支えてくださる先生方、自分たちの後輩たちなど、たくさんの人への感謝や想いを込めてするものだと思います。¹⁰⁾”
“教育学部1期生の先輩方が渡してくださったバトンには、初等教育学科の卒業生を含めた先輩方の思いもあるのだと感じることができた。今度は私たちが伝統を繋いで、3期生にバトンを繋いでいきたいと思った。¹¹⁾”

4年生は3年生に向けて、「みなさんなりの形で進めていってほしい」と語っていた。その願いは、教員がもつ願いと重なるところである。伝統だからやるのではなく、その年々の学生たちが、何のために何を目指してやるのかを自ら考え、その主体性を大事にしながらか進めた先に、伝統や文化が築かれていくように思う。教育学科1期生は、コロナ禍で消えそうになっていた合唱の火を再び明るく灯し、自分たちの形で成し遂げた。それは、合唱という手段を通して人と人との繋がりを再確認する機会ともなっていたはずである。そして、そのバトンを次の3年生が既に受け取っている。これからの学生が、どのような未来を創造していくのかを期待したい。

引用・参考文献

- 1) ご協力いただいた広島文教大学教育学部教育学科岡利道教授、川西正行教授、田頭穂積教授、村上典章教授には心より感謝の意を表する。
- 2) 児童教育コース音楽専修および幼児教育コース音楽ゼミが代々ゼミ内の引き継ぎ事項をノートやファイルに記録しているものであり、ゼミ室に保管されている。
- 3) 岡利道 編 (2010) 「初等教育学入門」、広島文教女子大学、p. 171

- 4)、5) 前掲書、p.170
6)、7)、8) 前掲書、p.171

- 9)、10)、11) 令和4年11月「プログラム育心」の
Glexaに提出された学生の記録より一部抜粋。

参考資料



【写真①教育学科1期生_3年ぶりの大学祭】



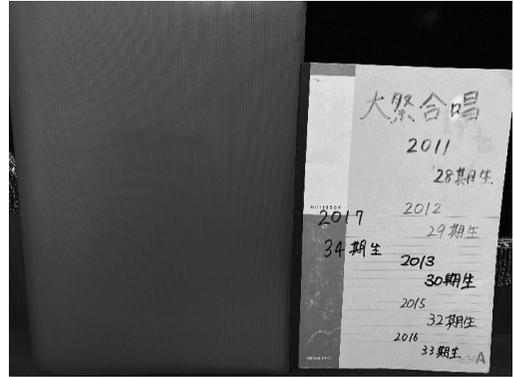
【写真②教育学科1期生_発表直前の様子】



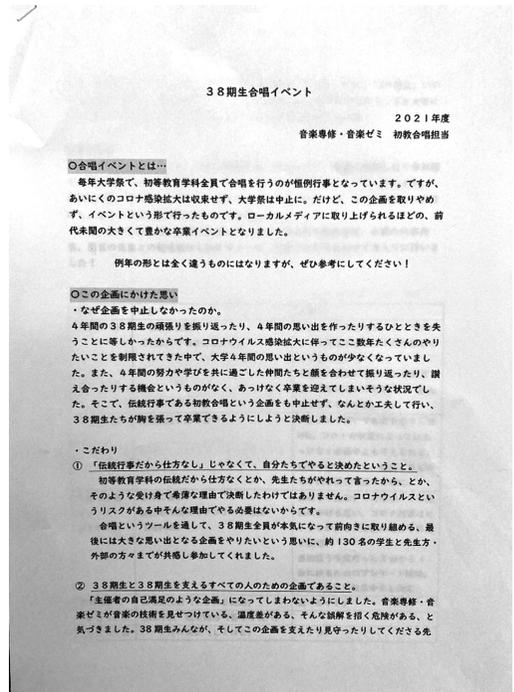
【写真③教育学科1期生_書写書道専修の学生が作成した横断幕の紹介】



【写真④教育学科1期生_大学祭合唱後の実行委員による挨拶】



【資料①児童教育コース音楽専修・幼児教育コース音楽ゼミ_引き継ぎファイルおよびノート】



【資料②38期_越智菜花学生作成_38期生合唱イベント報告資料】